

2009 年度改訂学習指導要領と授業実践の関係性に関する研究

- 「幸福」「正義」「公正」による公民科「現代社会」の「理念化」と「道徳化」について -

首都大学東京大学院人文科学研究科後期博士課程 岩井 司

1 目的

本研究は、高校公民科「現代社会」に焦点をあて、2009 年度(平成 21 年)改訂学習指導要領公民科「現代社会」とその解説で説明されている教育政策と学校現場での授業実践の関係性について、改訂内容とそれにもとづいた授業が実際にどのように行われているかを授業観察することで、現在公民科教育の中で起きているマクロな構造とミクロな構造を捉えることが目的である。

2 方法

そこで、データとして、2009 年度(平成 21 年)改訂学習指導要領公民科「現代社会」とその解説で説明されている改定内容と東京都内の X 高校のベテラン教師 A 先生による公民科「現代社会」の授業での参与観察の記録を用いて分析を行った。X 高校は都内の進学校で、担当している教師は、X 高校公民科担当の教師(50 代・教務主任)である。観察期間は、2011 年 5 月から 11 月初旬である期間は 5 月から 7 月初旬及び、二学期が開始する 9 月から 11 月初旬まで行い、授業中や授業外での教師の発言や授業の内容や教師と生徒とのやり取りや生徒同士の話し合いを記録したデータ、そして教師が作成したプリントや資料を分析した。

3 結果

まず改訂内容については、「幸福・正義・公正」という三つの言葉が公民科「現代社会」の改訂の目玉であり、公民科「現代社会」の指導上の留意点として三つの言葉がすべての単元で記されていた。

次に、学校現場の授業実践については関しては、「幸福・正義・公正」の言葉が教師の授業中の発言や教材から確認できた。そして、経験豊富な教師であっても「幸福・正義・公正」の言葉による避けがたい問題が見られた。

それは、「正義とは何か」や「理想と経験のどちらがいいか」などの問いで生徒に議論を行い、議論や授業内容が抽象的なものになってしまう「理念化」と個人の生き方在り方などの規範(どうあるべきか)を問う「道徳化」である。

4 結論

以上から、慎重さを兼ね備えつつも日々授業について意欲的に工夫をおこなっている教師でさえ、「幸福・正義・公正」を授業に反映させようとするや授業内容が抽象的な内容になってしまう「理念化」や人としての生き方や在り方などの価値観を問う「道徳化」が起きることが判明した。

では、なぜ授業の理念化や道徳化が起こるのだろうか。それは、教育政策の掲げる「幸福・正義・公正」の概念を授業に反映させる場合、具体的事例設定を欠くからである。

具体的事例を経ないために抽象的で話しにくく、具体的考察を経た慎重な考察を行いにくいという「理念化」問題や、生徒自身の話し合いが道徳性を孕んだ「～をするべきだ」という慎重な批判的考察なき価値観注入が行われる「道徳化」という危険性を孕んでいるといえる。